筑波学院大学紀要第11集　115 ～ 127 ページ　　2016年

＜研究ノート＞

踊り念仏の種々相（2）
－導御・一向・一遍・他阿－

坂本　　要*

Many Styles of Nenbutsu Dance (2)
― Dougo・Ikkou・Ippen・Taa ―

SAKAMOTO Kaname *

前号の空也及び空也派の念仏に続く論考である。踊り念仏は弘安元年（1278）一遍上人が小田切の里で踊り念仏を始めたとされる。しかしその年の前後に導御上人や一向上人も踊り念仏を始めたとされている。今回は一遍上人を含めて四人の踊り念仏とその後の展開を考えて見る。

1、導御上人

導御上人は弘安二年（1279）三月六日京都嵯峨の清涼寺で大念仏を催した。そのことは『融通念仏縁起絵』の嵯峨本最終段に「清涼寺の融通大念仏」として描かれ、説明されている。＜図１＞

その絵には、須弥壇前に台を据えその上で鉦をたたきながら踊っている二人の黒衣の僧と錫杖を振っていると思われる三人の僧が描かれている。この清涼寺の融通大念仏の段の他、良忍の念仏勧進の段では鉢叩き[1]・放下・暮露と思われる異形の者達が描かれている。またこの嵯峨大念仏は謡曲「百万」に女曲舞の百万が別れたわが子に会う場所となっている。導御・融通念仏・放下・曲舞等を嵯峨大念仏との関連を、現在の研究状況から探ってみよう。

＜融通念仏＞

導御が嵯峨の清涼寺で大念仏を始めたことは確かで[2]、そのことが『融通念仏縁起絵』の嵯峨本に描かれていることから、五来重はこの清涼寺の融通念仏の図を融通念仏が風流大念仏化する途中の段階と推測された[3]。

まず融通念仏から考えよう。融通念仏については「大念仏と民間念仏の系譜」[4]で述べたが略述すると、現在融通念仏の研究は融通念仏と融通念仏宗を分けることから始まっている。融通念仏の研究者である稲城信子氏は「融通念仏宗と呼ばれる宗派は、17世紀以降、大念仏寺を中心として、摂津・河内・奈良で行われていた融通念仏の講や寺庵・講中を組織化していった宗派である。それらは近世では「大念仏」と呼ばれたが、正式に融通念仏宗と認められたのは明治７年（1874）の

＊　筑波学院大学経営情報学部、Tsukuba Gakuin University

ことである。」としている[5)]。

実は融通念仏は五世尊永以降150年間法系が途絶えてしまう。この間法系はないものの道御が嵯峨野清涼寺で大念仏を行ったり、千本閻魔堂や壬生寺で大念仏を行ったりすることがあり、これが融通念仏ではないかとされている。このことについて最近の律宗の研究の進展から以下のような見解がなされている[6)]。

＜導御上人＞

導御の伝記は『本朝高僧伝』のほか『嵯峨清涼寺地蔵院縁起』『釈迦堂大念仏縁起』『壬生寺縁起』等導御の関与した寺院の縁起がある。これらは昭和４年に北川智海氏によって『円覚十万上人年譜考』[7)] としてまとめられたが、史実と伝承の両方が書かれて判然としない部分がある。導御は字名（あざな）で本名修廣、清涼寺の念仏会で十万の人を集めたことから十万上人といわれ、宇多天皇から円覚上人の号を賜った。このことから円覚十万上人導御として、大衆の間で親しまれた。

伝によると三歳の時父が死にやむなく母が東大寺の脇に捨て子をしたため、東大寺の梅本房で育てられ、東大寺で剃髪し、唐招提寺で具足戒を受ける。注意しなければならないのは当時の唐招提寺は律宗の拠点で、導御も律僧として活動を始める。したがって導御の伝記も『律苑僧寶傳』や『招提千歳傳記』[8)] の律僧伝記に記載されている。捨て子の話は晩年母と播磨で再会したという話になり、謡曲「百万」の元話であるとされた。

導御はまず壬生寺を復興し、法隆寺の律学院を拠点に勧進活動をし、法起寺を復興する。法隆寺夢殿で融通念仏弘通の夢告を得て、法金剛院・清涼寺・壬生寺で大念仏会を催す。『円覚十万上人年譜考』によると正嘉元年（1257）三十五歳に壬生寺地蔵院で融通念仏を行い、その後境内に心浄光院を建て住して大念仏を修した。建治二年（1276）五十四歳の時、法金剛院を下賜され融通大念仏を始修し、融通念仏根本道場に為す。弘安二年（1279）五十七歳、三月嵯峨清涼寺で大念仏を行い十万人を集める。嵯峨本『融通念仏縁起絵』の最終段の嵯峨大念仏の絵はこの時の様子であるとされ、須弥壇前で踊る僧が描かれている。

正安二年（1300）七十八歳、壬生寺で鎮花祭を開始し、除疫招福の為踊り念仏を修行せしめたとある。大和三輪明鎮花祭の式を融通念仏に融合化し、ここに一種の踊り念仏を創始したとある。このことが念仏狂言のもととなる。このことに関しては植木行宣・八木聖弥が疑義を呈しており、そのまま信ずるわけにはいかないとしている[9)]。

以上であるが導御は前述のように律僧として戒を受けており、融通念仏の徒もしくは勧進僧として全国を回った聖であるということを証するものはない。

清涼寺が融通念仏の拠点であったことは確かで、往生院三寶寺の過去帳には開祖を良忍として念阿・良鎮・法鎮と融通念仏の法系をつないでいる[10)]。嵯峨本『融通念仏縁起絵』の最後の段に清涼寺の大念仏を加えたのは、融通念仏側の良鎮が布教のために加えたものとされる。『融通念仏縁起絵』の普及は良鎮以降である[11)]。それ以前の正和本系の『融通念仏縁起絵』にはなく、嵯峨本以降全国に普及した明徳版に清涼寺の大念仏が描かれている。いずれにしろこの期の融通念仏と律宗とは共通するものがあり、相互に補いあっていた。したがって＜図１＞にある踊る僧も律僧ではないかと細川涼一は述べている[12)]。正安二年の壬生寺での踊り念仏は確たるものはないといえよう。

＜放下（ほうか）・暮露（ぼろ）＞

次に同じく『融通念仏縁起絵』に描かれている「放下・暮露」について考えて見よう。

放下も暮露も後世の念仏踊りにつながって

いく。すでに前稿「踊り念仏の種々相（1）」の空也系念仏で扱ったが、『融通念仏縁起絵』に数々の芸能者らしき人物が描かれている。

＜図２・図３・図４＞描かれているのは清涼寺大念仏の段と良忍の念仏勧進の段で融通念仏勧進の段は最も初期の聞名寺本にも芸能者らしき人物が描かれている。清涼寺大念仏の段は嵯峨本以降の諸本に加えられている。

聞名寺本の＜図３・図４＞は良忍と見られる僧が武士や女人に交名帖（きょうみょう）らしきものを広げて説明している下部に瓢箪を叩く男や蓑を着た男等数人の異形の人物が描かれている。瓢箪を叩く男については前稿で論じたが他は不明である。このような異形の一群については網野善彦が『異形の王権』の中で芸能者・職人・被差別民が異形の者として描かれることを論じている[13)]。嵯峨本の融通念仏勧進の段＜図２＞は聞名寺本より描かれている異形姿の人物は増えて十七、八人になっている。鉦叩きの僧・鹿角を持った僧、杁（えぶり）をササラで摺っている男、片足の男・いざり・覆面の男・派手な衣装を着て棹を持っている男等である。（鹿角（わさづの）を持った僧については前稿で論じた。派手な衣装の男については後述する暮露か。）

嵯峨本の清涼寺大念仏の段は須弥壇前で踊る僧についてはすでに述べたが寺庭で猿回しと瓢箪を持って踊るか遊ぶかしている二人の男が描かれている。（瓢箪の男については前稿参照）

もう一図このような雑芸の徒が描かれているものに『天狗草紙』がある。『天狗草紙』永仁四年（1296）に制作されたもので、旧仏教をはじめ新興の一遍や禅宗を批判して僧を天狗になぞらえて批判した絵巻である。製作者について天台宗系の学僧とされるが、同じく当時の仏教批判の歌論書『野守鏡（のもりのかがみ）』と一致しているところがあることから、同一人物とされる説がある[14)]。『天狗草紙』伝三井寺の第四段に一遍の踊りと「自然居士」と書かれた男の踊る姿が書かれている＜図５＞。

「自然居士（じねんこじ）」は観阿弥作とされる能の『自然居士』のシテとして有名であるが、人買いに連れ去られそうになった少女をさまざまな舞を舞って助けるという芸尽くしの能で、同様のものに「東岸居士」・「花月」・「放下僧」がある。この自然居士については実在の僧であり南禅寺で修業し、東福寺聖一国師につき、東山の雲居寺（うんごじ）で説経をして歌舞をもって布教したとある[15)]。禅宗系の僧で芸能をもって、説経・布教したとあり、このような俗態の僧がいたことは事実である[16)]。『天狗草紙』にみるように俗人姿でササラをもって踊っている芸能者で、『天狗草紙』の画中詞では自然居士は自然乞食のことであるとなっている。ササラをもって語るのは江戸時代初期の説経節につながる芸態である。

一方、放下僧は室町時代末期に成立された『七十一番職人歌合』の四十九番に鉢叩きと合わせて載っているので有名である。自然居士同様、禅宗の教えである「放下」を解く布教をしていたことが元の姿である。『七十一番職人歌合』には手にコキリコを持ち、烏帽子姿の俗人で腰に柄杓（ひしゃく）と刀をさし背に笹を背負い、腰蓑をつけて夜念仏を唱えるとなっている＜図６＞。柄杓は勧進柄杓であろうか、能の「放下僧」では様々な芸を披露しながら隙を見て仇討を遂げるという話であるが、「柱杖（しゅじょう）」という長い杖に白垂れと唐団扇をつける。唐団扇は禅僧の持ち物である。

暮露については当初『天狗草紙』の自然居士の下にいる「電光」とかかれているひる巻棒を持った男を暮露と見立てられていたが、黒田日出男はこれを否定している[17)]。暮露とは元は禅宗の修業をきびしく見取る僧の一団で髪をはやし、鉢巻をして、紙衣に黒袴、高下駄を履き、柱杖や傘を持つ＜図７＞。このような異様ないでたちで乱暴狼藉をはたらき、乞食として暮らしている。

放下や暮露は禅宗からでた異形の集団で放

下は曲芸をする芸能者として、暮露は虚無僧（菰僧）として尺八吹きに転じていく。

天竜川流域の三信遠国境地区に放下という念仏踊りが現在でもあり、背中に団扇を付けて踊る。放下の姿を風流化して念仏と習合したものと見られるが、設楽町の田峰では暮露とかかれた高提灯を掲げる。放下と暮露が風流化して念仏芸能の中に残ったものと見られる[18)]。

＜曲舞（くせまい）＞

念仏とはいえないが、導御の始めた清涼寺の大念仏をもととして能の『百万』が創作されたが、その劇中で大念仏が唱えられる。捨て子だった導御が清涼寺の大念仏で母親との再会を願ったところ、それが叶ったという故事にちなんだストーリーで、子と別れた百万という母が嵯峨の大念仏で再会する。十万上人導御の母で百万という。念仏は冒頭の百万が登場する場面で「南無阿弥陀仏」を唱えられるが、この段を車の段と言われることから舞車が登場し、その土車の上で曲舞が舞われたのではないかと推測されている[19)]。曲舞に念仏が入っていたことになろう。現行ではわが子を探す狂女姿の百万が「引けや引けや此車」と唱える。後半「南無阿弥陀仏南無釈迦牟尼仏」の唱えによりわが子と再会する。念仏にもこのような律宗の釈迦念仏が入る。実際清涼寺の大念仏が釈迦念仏を交えたものだった可能性は高い。嵯峨大念仏の時に曲舞が演じられたかは不明であるが、このような芸能の場として清涼寺の大念仏が考えられていたと言える。

以上律宗の導御の融通念仏との関係や清涼寺の嵯峨大念仏を『融通念仏縁起絵』や謡曲「百万」からみてきた。『融通念仏縁起絵』や謡曲「百万」のように弘安二年（1279）の大念仏が絵や曲にあらわされた。このような光景が展開したかは確かめられないが、このような絵を描くことによって諸芸の徒を融通念仏もしくは律宗に組み入れることがおこったということは確かであろう。

2、一向上人

次に一向上人のことを考えて見よう。一向俊聖上人（暦仁二年1239～弘安十年1287）は一遍上人（延応元年1239～正応二年1289）が弘安二年（1279）信州小田切の里で踊り念仏を始めたことに先立つこと五年前の文永十一年（1274）に宇佐八幡宮で四十八夜の踊り念仏を始めている＜図８＞。

一向上人については史料が少なく、おおかた大橋俊雄氏の諸著作により研究が進められてきた[20)]。一向の存在そのものに疑義のあるような状態であったが、平成８年山形県天童市の高野房遺跡（元仏向寺と言われる場所）から一字一石経に類する墨書のある礫が多数出土し、その中に「一向義空菩薩」の墨書があり、考古学的に一向の存在が確認された[21)]。一向については嘉暦三年（1329）五巻本・同阿本といわれる『一向上人伝』[22)]・永仁二年（1293）の『宝樹山称名院仏向寺縁起』・文明二年（1470）の『一向上人縁起』等が基礎史料となっている。しかし今回出土した墨書と上述諸伝の年号が一致しないとか宇都宮一向寺との関連とか、これから精査すべき課題がでてきた[23)]。

＜一向衆・時衆＞

一向上人は一遍上人と同じ年暦仁二年（1239）に生まれている。『一向上人縁起』『日本高僧伝』は両者が会ったことになっているが、前後の二人の足どりから後の創作と考えられている。ともに遊行し、踊躍念仏を行い、道俗を問わず粗末な衣で一向に念仏を唱えることを説いたなど、共通することが多いので、相互に連携があったのではないかという説もあったが、直接の関係を示すものはな

い。

論としては時衆や一向という言葉が特定集団の固有名詞としてあったのではなく、一般名称としてこのように表されるような集団が、この時代多くいたのではないかとされている[24)]。

一向宗の名については真宗の唯善が真宗高田派の顕智に「一向衆と号する成群の輩、諸国を横行の由、其の聞こえあり、禁制せらるべし」と嘉元元年（1303）に書状をおくっている。まだ宗派ではないので一向衆となっているが、一向に念仏を唱えたり勧めたりする集団を一向衆といったようで、法然や親鸞の徒も一向衆でとくに親鸞の教えをもとに一揆を起こすことを一向一揆といった。しかし唯善のいうのは一向上人のもとに集まったものが群をなし、批判の対象になっていることを指していて、同様のことは蓮如も苦言を呈している。「浄土真宗」の語は親鸞自身がこの言葉を用いているが、浄土宗側から「真」の名を用いるのはおかしいとして、一般には使わせなかった。明治時代になってから、真宗の語が使えるようになり、「浄土真宗」の名になったのは戦後である。江戸時代は一向宗・門徒宗が使われた。一向上人の一向宗は江戸時代には時宗に吸収されていたので混同はなくなっていた。

時衆という言葉は一遍上人も一向上人も使っている。毎日六時（六回）念仏を唱えることから道俗時衆の語が使われたとする。時衆は後に四代呑海（どんかい）上人にはじまる藤沢清浄光寺の遊行派が大勢を占め、江戸幕府に時宗として認可される。時宗には一向派を始め十二派があるが、一遍上人の時からすでに活動していた派があり、時宗が別れて十二派になったのではなく諸派が集まって十二派になった。というのは遊行しながら念仏を説く集団が時衆で、男女群れをなし旅をして歩き、下賤のものも拒まなかったため、非人・職人・芸能者がここに流入した。前述した『融通念仏縁起絵』『天狗草紙』に描かれた異形の群れの中から時衆になるものも多かった。特に一向派には葬儀を扱ったものが流入したとされる。

＜一向上人の踊り念仏＞

さて実際の一向上人の踊り念仏をみてみよう。五巻本『一向上人伝』でたどっていく。

１、巻一の最期文永十一年（1274）夏大隅八幡宮四十八夜の不断念仏に夢に童子があらわれ四十八茎の未敷（つぼみ）の蓮華を賜う、夢覚めてその蓮華があり、歓喜踊躍した。

２、巻二　宇佐八幡で四十八夜の踊り念仏を修した。宇佐より四国に渡る途中嵐に会いひたすら念仏を唱え助かる。讃州須崎に上陸し、船中のことを思い踊り念仏を修す。この時四反十二段の法式の踊りになった。これは四×十二の四十八願を表す。この四反十二段の踊り念仏は天童市の仏向寺で現行されている[25)]。

３、巻四　弘安七年（1284）加州金沢の道場で踊躍念仏をする。聖道の僧が踊り念仏の経証を問うたところ上人はたちどころに答えた。絵は道場の回廊と思われるところで、一向衆の七人の僧が行道するように念仏で踊っている。参詣客がそれに向かって拝んでいる。『一向上人伝』の中で踊り念仏が描かれているのはこの場面のみである＜図９＞。

４、『一向上人縁起』（文明二年1470蓮華寺蔵）では巻四に弘長二年（1262）出雲の水尾大明神で七日七夜踊り、巻七に建治元年（1275）尾州津島神社でおなじく七日踊ったとある。『一向上人縁起』は文明二年（1470）とされるので、この二例は後世のなんらかの都合で付加された可能性が強い。

以上が一向の踊り念仏で『天狗草紙』に「馬衣をきて衣の裳つけず念仏する。時ハ頭をふり肩をゆりておとる事野馬のごとし」といわれたのは一向衆の踊りで「牧子（ぼっこ）」というぼろ着を着て踊った。

＜その後の一向衆＞

一向亡き後二代の礼阿智は教団として蓮華寺にとどまり、毎日二時踊躍念仏或いは行道を行った。踊躍念仏は行道と同じく修行として行うようになった。三代の良向は『一向上人伝』を製作し、布教につとめた。室町期の一向宗については記することが少ないが各地に一向堂（鎌倉前浜）や一向寺ができる。宇都宮、小栗の一向寺は建治二年（1276）の一向上人が順錫のおり創建されたといわれ、他に佐野市堀米・古河・鹿沼に一向寺があり関東五向寺といわれている[26)]。

江戸時代に入ると時宗に吸収され、貞享年間・天保年間分派運動を起こすが、認められず、明治時代以降もこの運動は続くが、最終的に浄土宗に属して現在に至る。

現行の仏向寺の踊りは二代礼智阿上人が法式を定めたもので始めゆっくりとして段々早くなる踊りである。近江蓮華寺でも行われていたが現在行われていない。

3、一遍上人

一遍上人の踊り念仏については、幾多の論があり再説できないくらい多い。ここでは『一遍聖絵』『遊行上人縁起絵』にでている踊りの紹介とその時宗の法式として行われている踊り念仏のみを取り上げる。

一遍上人の伝記絵には二つの系統があり、親鸞等の他の祖師伝絵に比べると単純である。一つは一遍の生涯のみを扱った聖戒編の『一遍聖絵』十二巻、一つは宗俊編『一遍上人絵詞伝』十巻で、これは前半四巻が一遍上人で後半六巻が二祖他阿真教上人の伝記になっている。そのことから『遊行上人縁起絵』といわれる。『一遍聖絵』を製作した聖戒は十年間一遍と行動をともにしており、絵の描写は細部を極めている。京都歓喜光寺のものが原本である。『遊行上人縁起絵』は原本が伝存せず、十五本ほどの写本があり、図柄も異なる[27)]。

＜『一遍聖絵』『遊行上人縁起絵』に描かれた踊り念仏＞

『一遍聖絵』で踊り念仏が描かれているのは七カ所である。

１、信濃の小田切の里での踊り念仏＜図10＞

一遍上人は縁先で提（ひさげ）（酒を盛る器）を叩いている。庭では道俗が輪になって踊り始めている。輪の中には僧と尼が踊り出している。僧は念仏房といわれる。

伴野で歳末別時に踊り念仏を修す。

２、相模の片瀬の地蔵堂での踊り念仏

板屋の高舞台が組まれ、その上で時衆の徒が踊っている。一方向に行道しながら踊っているように見える。俗人は見物している。

４、近江関寺での踊り念仏

関寺には門を入ると四角い池があり、その中島に踊り屋が立てられていて、その中で時衆の徒が踊っている。見物人は池のまわりで見ている。

５、京都市七条の市屋道場＜図11＞

空也上人ゆかりの地での踊り念仏。ここに高屋の踊り道場を建て四十八日間踊り念仏を興行した。桟敷や小屋が設けられる一方車で見物に来る人も多い。

６、山城の淀の上野

石清水八幡の詣でたあと淀川縁（へり）で簡単な踊り屋を設け踊り念仏を催す。

７、淡路二の宮での踊り念仏

屋根だけで床板がないなかで、踊り念仏が行われた。

『遊行上人縁起絵』ではどの写本も踊り念仏が描かれているのは三カ所である。

１、第二巻信濃の伴野での踊り念仏＜図12＞

『一遍聖絵』では小田切の絵のあとに大井太郎の屋敷でも踊り念仏三日三晩踊り念仏をしたという詞書があるが、これをあらわす絵はなく、大井太郎の家柄出る一遍一行の絵に

なっている。『遊行上人縁起絵』の伴野の念仏はこれを指すと考えられる。どの写本も一遍が中に入って踊っているもので、小田切の縁先でひさげを叩いて拍子をとっている絵とは異なる[28)]。

２、第七巻善光寺妻戸（つまど）での念仏＜図13＞

善光寺本堂の入り口に別に妻戸の建物があり、時衆が管理していたとされる。図は建物ではなく。舞楽台のような踊り場があり、大勢の僧が一遍を中心に行道しているように見える。「日中の念仏は毎日御前の舞台にして勤られけり」とある。踊り念仏か行道か不明である。

３、第十巻摂津国兵庫で一遍の十三回忌の踊り念仏を行う。「聖調声をつとめらる」とあり、他阿が調声（ちょうしょう）を勤め、「大衆踊（躍）の行地もとゝろくはかりなり」とある。

以上であるが始め『一遍聖絵』で信濃の小田切で自然発生的に起こったように描かれている踊り念仏の輪には一遍は入っていない。縁先で拍子をとっているだけであった。踊っている人には俗人もいる。次の伴野の念仏が『遊行上人縁起絵』清浄光寺本＜図８＞に描かれているように僧のみで踊ったとしたら、この伴野から意識的に一遍が踊ったということになる。その踊りには僧だけのものになっている。その二年後片瀬の浜での踊り念仏は屋台設けた見せるための踊りになっている。この間踊り念仏は儀礼的に整備されたものになり、後述するようにその過程で行道や和讃が入ったことが考えられる。踊り念仏そのものは偶発的に始まったものとしても、その後の儀礼は行道を踊り化し、踊りは和讃で踊った可能性がある[29)]。

京都七条市屋では桟敷を設けている。踊り念仏の見世物化である。賦算も行われた。

この踊り念仏が鎮魂のためなのか、純粋に歓喜踊躍のものであるのかが論点になっている[30)]。筆者としてはすでに「鎮魂語疑義考」を書いて鎮魂観念の否定をしていることから後者の説をとりたい[31)]。もし踊り念仏が鎮魂的側面をもつ民俗的観念を基底に持つ踊りであるならば、なぜ俗人の参加が見られないのであろうか。仏を讃嘆するか、みずからが仏になる、または念仏そのものになるというのが一向や一遍の考え方である。そのための踊りが純粋歓喜の踊りであるという見解を否定することはできない。

＜「踊り念仏儀」の構成＞

この踊り念仏がどのようなものであったかは『天狗草紙』や『野守鏡』にあるように喧噪で猥雑なものであったという批判者からの観察によってイメージされているが、そうであろうかという疑念がわく。というのは『一向上人伝』の絵や『一遍聖絵』の絵の多くが行道の延長ととれるような図である。輪を描くことも共通している。

また踊り念仏が、ただ念仏を唱えて踊るというメチャクチャ踊りであったとも考えにくい。この念仏踊りは一向派の場合は二代礼阿智上人のとき法式として定め、袖のない編み衣に未敷蓮華の模様の入った袈裟衣を着る。踊りは注25に記したように和讃・行道から唱えの念仏を主にしたものに移り、踊りをもって終わるといった十二段の構成をとる。

一遍からの法系の主流となった藤沢の遊行派は第七代託何の代（延元三年1338～正平五年1354）に『条条行義法則』等法式の整備を図った。時衆には当初から声明が入っていて，調声という役が法要を導いていく。二祖の真教がその役で踊躍念仏・六時の勤行に置いても指導的な役をになった。前述の『遊行上人縁起絵』清浄光寺本巻十の摂津国兵庫の祖師十三回忌のところで「調声は（一遍）上人在世より（真教）聖一人つとめられけるを」とあり、この日も特に十三回忌なので「聖調声をつとめられける」とある。

永正二年（1505）に第二十一代遊行上人

知蓮の時に『調声口伝儀』が編集されている[32]。現行の「踊り念仏儀」による踊り念仏は声明を取り入れたゆったりしたものだが、戦国時代から始まって江戸時代中期に完成したものとされる[33]。現在薄（すすき）念仏として行われている踊り念仏は享保年間（1716～1736）までは「庭踊り」・「踊念仏」と行われたものである[34]。踊り念仏儀の儀礼[35]は仏を迎え二河白道を渡って浄土に到達するような構成になっている。和讃が最後につくが時宗の和讃の古さからして念仏踊りは和讃で行ったのではないかということを和讃の研究家である多屋頼俊は述べている[36]。

このように念仏踊りも和讃や引声念仏のようなものも入れ、現行の百万遍念仏のように念仏を段々早くして踊ることになったと考えられるが、現在のところ一遍の時代の唱え方、踊り方を確定できるものはない。ただ念仏をやみくもに唱えて踊ったものではなく、小田切の踊り念仏から二年後の片瀬の高屋での念仏の間に儀礼的に整えられて踊られたとするのが自然であろう。

4、おわりに

今回通観した文永から弘安にかけての導御・一向・一遍の踊りはほぼ同時期に起こっている。これは文永・弘安の蒙古の襲来という時期に重なる。したがってこのような狂騒的な念仏踊りとか異形の者の出現といった現象は社会不安によって引き起こされたという説が網野氏他から唱えられている[37]。さらに大きな見方をすると鎌倉時代からの中世被差別民の成立を前提となり、一向・一遍等の時衆や融通念仏・律宗などはそれらの人々を受ける受け皿として肥大化していったととれる[38]。遊行という一所不在の形態が非人・芸能者・職人の生活形態と一致するからである。このような傾向が南北朝のバサラを生み出すと松岡心平氏は述べている[39]。確かに鎌倉末期から南北朝にかけての遊行僧や異形の人物の湧出をこの期の特徴とみることができよう。

その後これらの踊りは時衆の主流派である藤沢遊行派では法式化され、儀礼化されたと考えられる。少し時代は下るが天正二年（1574）に描かれた上杉本『洛中洛外図屏風』左隻四扇の北野社経王堂の左に台の上に立ち鉦を叩いて踊っている一人の僧と勧進柄杓を持つ僧が描かれている＜図14＞。踊り念仏で勧進と布施を乞うもので三人の見物の女人が描かれている[40]。勧進の僧による踊り念仏はこのように踊られたようである。僧にとっては修行でもあった[41]。

次の踊りの流行は室町末期から江戸時代初頭にかけての風流踊りの爆発的流行である[42]。

注

（注１）坂本要「踊り念仏の種々相（１）」『筑波学院大学紀要』No.11 筑波学院大学2015にこの絵の鉢叩き等について論じている。

（注２）慶長十五年「清涼寺別時念仏旧例覚」清涼寺文書より　水野恭一郎・中井真孝『京都浄土宗寺院文書』1980 同朋舎

（注３）五来重「『融通念仏縁起』と勧進」『新修日本絵巻物全集　別巻 1　弘法大師伝絵巻・融通念仏縁起絵・槻峯寺建立修行縁起』1970 角川書店

（注４）坂本要「大念仏と民間念仏の系譜」『筑波学院大学紀要』No. 9 筑波学院大学2013
「融通念仏宗では良忍（1072～1132）法明（1279～1321）大通（1649～1716）を三祖とするが良忍から法明・法明から大通の間の実態は不明な部分が多く、元禄年間になって大通が寺院法度に対応すべく、体裁を整え、教線の拡張をはかって初めて宗派らしい形態をとったといえる。それ以前にあっては浄土系の聖や篤信者が講を組み、それらが主体となって融通念仏を行ったのが実態ではないかと思わ

れる。」

（注５）稲城信子「大和における融通念仏宗の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』№112国立歴史民俗博物館 2004･「融通念仏信仰の展開」『法会（御回在）の調査研究報告書』1983 元興寺文化財研究所・「中世末から近世における融通念仏信仰の展開」『近世仏教』No.21近世仏教研究会 1988

他に融通念仏についての最近研究は以下のような論文がある。

大澤研一「融通念仏の六別寺にいて」『研究紀要』No.24大阪市立博物館 1992

西岡芳文「融通念仏宗の草創に関する新資料」『金澤文庫研究』No.324神奈川県立金沢文庫 2010

（注６）細川涼一「法金剛院導御の宗教活動」『中世律宗寺院と民衆』吉川弘文館1987・「導御・嵯峨清涼寺融通大念仏会・「百万」」『文学』vol.54岩波書店 1986年３月

（注７）壬生寺住持の北川智海の著で非売品、昭和４年発行所律宗別格本山壬生寺となって、史料・伝承に「海云」と智海氏の解釈を加えている。45p

（注８）いずれも旧『大日本仏教全書』105巻所載で「戒律傳來記」他に入っている。

（注９）植木行宣「壬生狂言の成立」『壬生寺民俗資料緊急調査報告』1973 元興寺仏教民俗資料研究所

八木聖弥「壬生狂言の成立について」『文化史学』No.37 文化史学会 1981

（注10）塚本俊孝「嵯峨清涼寺に於ける浄土宗鎮西派の流入とその展開―清涼寺史近世篇―」『佛教文化研究』No. 5 仏教文化研究所 1954

（注11）田代尚光『増訂融通念仏縁起之研究』名著出版 1976

良鎮については『大念仏誌』では寿永三年（1184）没とされているが、三宝寺過去帳や嵯峨本末尾詞書きの応永二十四年（1417）・根津本の永徳三年（1383）「融通念仏勧進のため此の絵を六十六か国に伝賦する」との記事からこの頃の生没年とする。田代氏の説では融通念仏の法系の断絶をつなぐため法明上人が改策したとする。

（注12）細川涼一「道御･嵯峨清涼寺融通大念仏会･百万」『文学』vol .54-3 岩波書店 1986

（注13）網野善彦「異形の風景」「異形の力」『異形の王権』1986 平凡社

（注14）梅津次郎「天狗草紙について」『新修日本絵巻物全集 27 天狗草紙・是害房絵』1988 角川書店・「天狗草紙考察」『絵巻物叢誌』1972 法蔵館

土屋貴裕「「天狗草紙」の復元的考察」『美術史』No.159 美術史学会 2005　では製作者に東密の寂仙上人遍融の周辺を挙げている。

『野守鏡』著者については源有房説が強い。

（注15）金井清光「作品研究（自然居士）」『能の研究』1969 桜楓社

（注16）原田正俊「放下僧・暮露にみる中世禅宗と民衆」『ヒストリア』No.129 大阪歴史学会 1990

黒田日出男「放下僧と暮露―『天狗草紙』の自然居士たちの姿を読む―」『国文学　解釈と教材の研究』No.37-14 學燈社 2012年２月　黒田氏は自然居士を実在の人物としている。

（注17）原田・黒田（注16）に同じ。

（注18）坂本要　三信遠大念仏の構成と所作『民俗芸能研究』No.50 民俗芸能学会 2011

（注19）香西精「女曲舞百万」『能謡新考』1972 檜書店

（注20）大橋俊雄『番場時衆のあゆみ』1953 浄土宗史研究会・『踊り念仏』1964 大蔵出版

（注21）『成生庄と一向上人』天童市立旧東村山郡役所資料館 1997・古賀克彦「一向俊聖伝の再検討」時宗教学研究 No.26 時宗教学研究所 1998・小野沢真「一向俊聖教団の歴史的意義とその再検討」『文化』No.70-1, 2 東北大学文学会2006→『中世時衆史の研究』八木書店 2012

（注22）江州番場蓮華寺第三代同阿良向が製作したものといわれ五段の詞書と二十三の図から

なっている。蓮華寺藏
竹内真道「蓮華寺藏『元祖一向上人御繪傳』（五巻伝）について」『高橋弘次先生古稀記念論集（第一巻）浄土学仏教学論叢』山喜房仏書林 2004

（注23）この墨書は一向二十七回忌の供養と思われるが、墨書から逆算すると弘安七、八年になくなったことになる。また栃木県宇都宮から行雲が厳修していることから下野との関係が強かったこともわかる。また俊聖でなく義雲という菩薩名を使っていたことなど新発見が多い。

（注24）以下は小野沢真『中世時衆史の研究』八木書店 2012 によるところが大きい。

（注25）四反十二段は現行では次のとおりである。
１、舎利念仏　２、和讃　３、行道念仏
４、モ上ゲブユリ　５、阿ハリブ引キ
６、陀下ゲブ上ゲ　７、重ネモ引キ
８、半ブセ念仏　９、足踏念仏
10、踊躍念仏　11、屈伸念仏　12、結式念仏

（注26）茨城北部から栃木県にかけては時宗寺院の多い地区で、筑波山北方の峰にある西光寺には踊り念仏碑がある。（正徳五乙未天 1715
踊り念仏供養　　八月吉日　村中之若衆
同行五十人）

（注27）宮次男「一遍の伝記絵巻」『一遍上人絵 日本の美術』No.56 至文堂 1961
歓喜光寺本に錯簡があり上塗り部分もある。（宮次男「一遍聖絵の錯簡と御影堂本について」『美術研究』No.244 東京国立文化財研究所美術部 1966・大山昭子「修理報告国宝一遍上人絵伝」『修理』No. 7 株式会社岡墨光堂 2002）

（注28）踊り念仏の場所が小田切の里・伴野市庭・大井太郎館の三ヶ所が錯綜していることについて、論争があるが決していない。
平林富三「一遍上人の昨佐久郡伴野庄巡錫に就いて」『信濃』No. 4 -11 信濃郷土研究会 1952年11月
井原今朝男「信濃国伴野荘の交通と商業」『信濃』No.35- 9 信濃郷土研究会 1983年 9 月
今井雅晴「踊り念仏の成立」『捨て聖一遍』1999 吉川弘文館 他
牛山佳幸「一遍と信濃の旅をめぐる二つの問題」『時衆文化』No. 9 時衆文化研究会 2004
井原今朝男「信濃国大井荘新善光寺と一遍（上）」『時衆文化』No.16 時衆文化研究会 2007
井原今朝男「信濃国大井荘新善光寺と一遍（下）」『時衆文化』No.17 時衆文化研究会 2008
佐々木哲「一遍時衆踊念仏始行と小田切郷地頭」『時宗教学年報』No.38 時宗教学研究所 2010
伴野敬一「跡部の踊り念仏―その歴史と現在―」『跡部の踊り念仏』跡部踊り念仏保存会 2015

（注29）黒田日出男「踊り念仏の画像―身体論の視点から―」『週刊朝日百科　日本の歴史　別冊　歴史の読み方１　絵画史料の読み方』踊り念仏を行道との関連から右回りであることに注目している。また西郷信綱説（「市と歌垣」『古代の声』1985 朝日新聞社）を受けて歌垣との関連を示唆している。

（注30）砂川博「踊り念仏論」『一遍聖絵の総合的研究』2002 岩田書店での今井雅晴を批判
今井雅晴「踊り念仏と一遍とに関する二、三の問題」『日本仏教史学』1983 日本仏教史学会。
砂川氏が鎮魂説・今井氏が純粋歓喜説である。

（注31）坂本要「「鎮魂」語の近代―「鎮魂」語疑義考１―」『比較民俗研究』No.25 比較民俗研究会 2011・「研究史に見る「鎮魂」語―「鎮魂」語疑義考２―」『比較民俗研究』No.26 比較民俗 2011・「怨霊・御霊と「鎮魂」語―「鎮魂」語疑義考３―」『比較民俗研究』No.27 比較民俗 2012

（注32）金井清光「時衆和讃と調声」『時衆文芸と一遍法語』1987 東京美術
他阿真教については大橋俊雄「真教と時衆教団の成立」『時宗二祖他阿上人法語』1975 大蔵出版に詳しい。

（注33）橋俊道「定型から自由化へ」『一遍大上人開宗七百年記念時宗踊躍念仏儀』1975 足利市

常念寺

（注34）今井雅晴「薄念仏会にみる時宗儀礼」『中世社会と時宗の研究』1985 吉川弘文館

（注35）踊り念仏儀に関しては、前掲の足利市常念寺の他にまとまったものは手元にないが、秋山文善「踊躍念仏儀の構成」『時衆研究』No. 6　1954年6月によると以下のようである。以下は筆者が一覧化して用語をあてはめて作成したものである。

合喚磬―弥陀本願の招喚・釈迦発遣
幽音磬―選拓念仏への迷い
反転磬―踏み切って転開
高音念仏―穢土離脱
漸大・漸小磬―二河白道を緩急をもって進む
騰神踊躍入西方―浄土に踊り込む
記苟・作相磬―報仏
詠嘆磬―仏讃嘆
和讃
讃終

（注36）多屋頼俊「移動する和讃」『和讃の研究著作集2』1992 法蔵館

（注37）網野善彦『異形の王権』1986 平凡社
今井雅晴「踊り念仏の成立」『捨て聖一遍』1999 吉川弘文館

（注38）脇田晴子『日本中世被差別民の研究』2002 岩波書店

（注39）松岡心平「室町の芸能」『岩波講座日本通史　第9巻』1994 岩波書店

（注40）佐竹昭弘「絵を見る人はあれど―標注抄記―」岡見正雄・佐竹昭広『標注　洛中洛外屏風　上杉本』p167　1983 岩波書店

（注41）時衆は遊行上人の賦算による勧進という考えに立ち、金品の喜捨による勧進には否定的であった。この図は藤沢遊行派以外の時衆を描いているとも考えられる。
佐竹昭弘は「時衆」としているが『図説上杉本洛中洛外図屏風を見る』（小澤弘・川嶋将生 1994 河出書房新社）の中で川嶋将生は「勧進聖」としている。
時衆一向派では念仏踊りは修業の一環ととらえている。

（注42）山路興造「風流踊り」『近世芸能の胎動』2010 八木書店

図1　『融通念仏縁起絵』（嵯峨本）嵯峨大念仏の段・本堂内

図２　『融通念仏縁起絵』（嵯峨本）
嵯峨大念仏の段・前庭

図４　『融通念仏縁起絵』（聞名寺本）
良忍上人勧進の段

図３　『融通念仏縁起絵』（嵯峨本）良忍上人勧進の段

図５　『天狗草紙』三井寺巻
自然居士

図６　『七十一番職人歌合』
四十九番
放下

図７　『七十一番職人歌合』
四十六番
暮露

図８　一向上人画像
（近江蓮華寺藏）

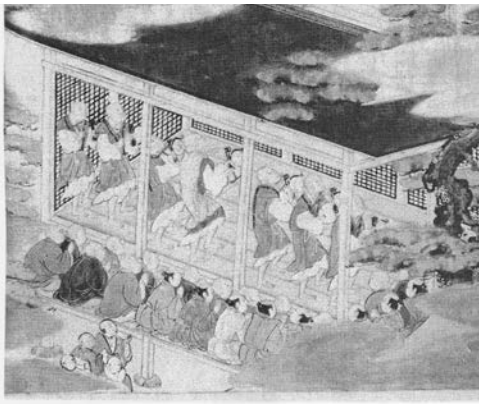

図９　『一向上人伝』巻四　金沢での念仏踊りの段

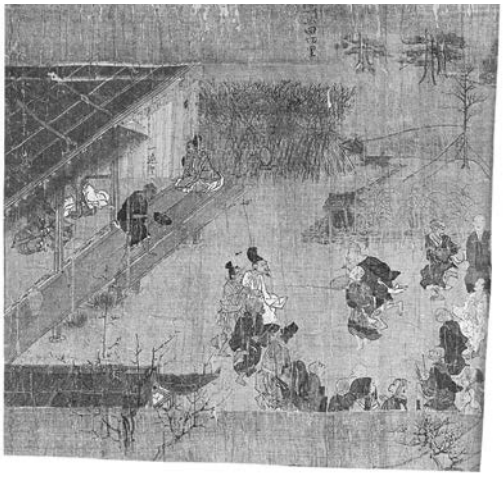

図 10 『一遍聖絵』巻四　信濃小田切での踊り念仏

図 11 『一遍聖絵』巻七　京都七条市屋での踊り念仏

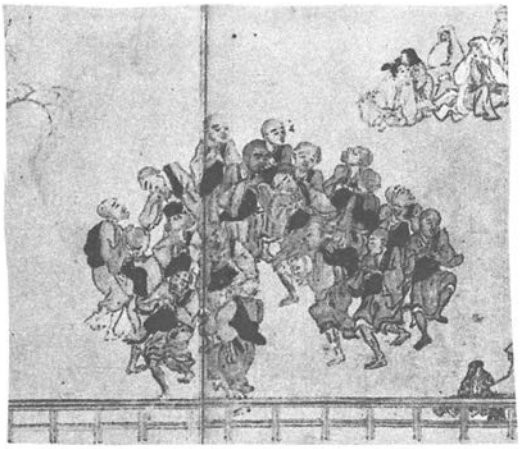

図 12 『遊行上人縁起絵』第二巻（清浄光寺本）信濃伴野での踊り念仏

図 13 『遊行上人縁起絵』第七巻（清浄光寺本）　長野善光寺での踊り念仏

図 14 『洛中洛外図屏風』（上杉本左隻第四扇上部）時衆僧の勧進念仏